
この青空に星を

mohi-san

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この青空に星を

【Nコード】

N8378Y

【作者名】

mohi-san

【あらすじ】

ある日を境に『先輩』はあっさりと俺の前から姿を消した。それから一年。

同じクラスに転校してきた子は『先輩』と同姓同名の女の子で……

よくありそうな地味なお話し

読む前に。

『恋愛』というテーマでお話を書いたことがなかったので、試しに書いてみた実験的なお話です。

過去の事を引きずった少年が、『転校生』というワードをきっかけに、周りと関わり、どのように乗り越えていくか……

そんな内容が書ければと思っています。

ハーレム要素などはありません。主人公がモテまくる、というような話を期待している方はごめんなさい。その予定もありません。

一人称で書いたのも久しぶりになるので、変、というか読みにくい所もあるとありますが、それはおいおいなんとかしていけるよう努力していこうと思います。

更新も不定期です。ストック溜めて一気に放出、という形をとると思います。

これら全てが許容できる、という心広いお方は、まあ、暇つぶし程度に読んでやってください。

はじめは往々に……

「衣笠って天才だよな」

放課後の教室。机に足を乗せ、だらしなく座るクラスメイトが言った。

もう何度周囲から聞かされたか分からない言葉だ。だから返す言葉は決まっている。

「そんなことはない——俺はただの凡人だよ」

「なんだよそれ、嫌味かよ。成績は学年で常に一番、運動神経もいい。そのうえ顔も悪くないときてる。ホントにいるんだな、お前みたいな完璧なやつ。どこのギャルゲの主人公だってオレはいいたいぞ」

「なんだそれは……」

呆れながら返すと、クラスメイト、灰谷はニヒツと少年を思わせる人懐っこい笑みを見せる。

元を辿れば俺をからかって（……）出た笑顔だろうが……正直いつてこいつのこういう表情は嫌いではない。少なくとも他の上辺だけの笑顔を見せる奴よりは何倍も好感が持てる。

でもやはりそこは俺も人間。釈然としない気持ちはあるわけで……

…、だから、

「あ、でも俺にも一つ欠点があつた」

「なんだそれ？ 弱みならとことん突いてやるぞ」

「お前みたいな不良が友達にすることだ」

意趣返しを込めて答えれば、灰谷はきよとした顔を浮かべー

瞬後には、

「違いねえ」

とまた、あの人懐っこい笑みをみせた。

だからこいつは嫌いになれない。

俺も唇の端を僅かに吊り上げ笑みをみせると、そういえば、と灰谷が唐突に切り出した。

「どうした？」

「もうすぐ一年だな」

「なんだ？ お前が最後に拾い食いをしてからか？」

「ばーか、ちげえよ。ほら、先輩が転校してからだよ」

『先輩』、その言葉に胸がちくりと痛む。

無意識に左胸にもって行きそうになる右手を左手で押さえ、

「なんだよ、突然」

平然な風を装って返して見れば、灰谷ははあ、と短くため息を吐き、

「顔、こわばってるぞ」

「……………」

その指摘に言葉を失う。

「まだダメみたいだな」

「……………そんなことはない」

「そういう事はそ平然とした顔で嘘をつけるようになってから言え

よ。先輩のことまだ引きずってるんだろ？」

どうなんだろう？ いや、考えるまでもない。考えるまでもないんだ。すでに答えは俺の中で出ている。ただ、その事実を素直に受け止められるか、受け止められないか、まあ、指摘されて素直に頷けるほどに、俺の心根は真っ直ぐではないことは確かみたいだが。

「アメリカ……遠いよな」

窓から見える茜色に染まる西の空を遠く見つめて灰谷が言う。

脱色した派手な金色の髪に、耳には安全ピンに似たピアス。前ボタンははずされシャツの隙間からは、センスがいいとはとても言えない派手な柄のシャツが除く。一般的に見ればだらしない格好、けれど彼いわく最高の格好なんだとか……、まあどうでもいいことだが、彼のシャツのセンスだけではどうにもいただけないと思う俺のセンスの方が一般からずれているのだろうか。いや、ほんとにどうでもいいな。

それはさておき、夕日に照らされて深い陰影をつくる横顔で黄昏ている姿は結構さまになってるから不思議だ。いや、不思議に思うことが不思議なのか。実際こいつはモテる。顔は俺から見ても整っていると思うし、世間一般で言ういわゆる『イケメン』という部類に入ると思う。だからこれは、俺がそう思ってしまうのは、いつのまにか俺とこいつの距離が、そう思えてしまえるほどに近づいていた証拠なのだろう。うん、これは意外な発見だ。

けれど一つだけ言っておかなければならない事がある。

「浸っているとこ悪いが灰谷」

「なんだ悪友？」

「その方角にアメリカはないぞ」

「えっ！？ マジで……」

灰谷は振り返ると、恥ずかしそうな顔をこちらに向け、焦った表情で、

「アメリカってこっちなじゃなかったっけ？」

「おまえがどういう認識か知らないが、少なくとも日本海側にはないな」

「いや、けど地球って丸いじゃん！一周すればつくだろうー！」

確かに地球は丸いから、そういう言う方をすれば大抵の国は掠るだろうが灰谷、一周したら日本だバカ。

「まあ、そういう事にしといてやるよ」

「あ！いまお前オレのことバカにしたろ」

「してないよ」

「いーや嘘だ！すんげえバカにした顔してた」

「どんな顔だよ……」

オレは本日二度目の呆れ顔を作りながら、壁の掛け時計を見た。
現在の時刻は午後五時十分前。

先輩と別れて一年。

先輩……あなたの顔を最後に見てから今ちょうど一年が経ちました。

放課後センチメンタル

学校からの帰り、灰谷と別れ、一人帰路を歩いていると背後から声を掛けられた。

「キ又ガサ！」

活発な明るい声。そして後ろに妙なアクセントをつけて俺の名前を呼ぶ奴を俺は一人しか知らない。

振り返ると、少し離れた距離に予想裏切ることのない顔が――腰までありそうな長い髪を頭頂部で一つに纏めた髪型。少し赤味がかった茶色の髪。意思の強さを伺わせる同色の瞳。整った顔立ちは、日本人と言うよりは欧州系の顔立ちに近いたためハーフのようにも見える。

快活な雰囲気を纏った少女はこちらが振り返ったのを認めると元気よく手を振る。その動きに合わせて元気よく揺れる後ろ髪がまるで尻尾のように見えて、喜びはしゃぐ犬を連想させる。それがなんだか少しおかしい。

俺は軽く手を上げて応えようと、

「母夏」

彼女の名前を呼んだ。制服を着ている所を見ると母夏もいま帰りらしい。

深咲^{みさき} 母夏^{もなつ}、灰谷と並んでよく話すことの多い元クラスメイトだ。『元』というのは、去年まで一緒のクラスであって今は違うクラスになってしまったからなのだが……クラスが変わっても彼女は何かと俺に構ってくれる。

それに去年は色々あつてお世話になりっぱなしだったので、俺の中では頭のあがらない数少ない存在の一人でもある。

彼女は追いつくと横に並び、

「いま帰り？」

綺麗な目元を細めて嬉しそうに聞いてくる。

「みたまんまだけど」

「ぶゝ、反応が冷たい」

「そうか？」

「そつだよ。普通そこは『うんいま帰り、母夏も？』みたいな感じで会話を膨らましていくもんじゃんよ」

「そんなものかな……。それより珍しいな、母夏の帰りがこんなに遅いなんて」

左にはめた腕時計に視線を向ける。特にこれといった特徴のないシルバーのクラシックタイプのアナログ時計だ。盤面には短針が五と六の半ばほど刺し、長針は既に半分を超えている。いつも終礼からさほど時間を空けずに帰る彼女にしてみれば、随分と遅い時間だ。俺の言葉に、母夏は整えられた眉を寄せ、不満もあらわに、

「それが聞いてよゝ、木崎の奴がさ」

と切り出した。

木崎は母夏のクラスの担任だ。正直評判はあまりよくない。その理由として、恐らく今の彼女の不満が全てなのだろうが……。彼女は続ける。

「いち早く教室を出ようとしたら、それが目に止まったらしくてさ

」。『俺の話がそんなにつまらなかったか』とか嫌味っぽく言っちゃって、あげくに嫌がらせのように手伝いを押し付けてきてさ。もう、ほんと最悪!」

その時の事を思い出したからなのか、怒りが再燃、と言った感じで今にも歯軋りでも立てそうな勢いで『ぐぐぐ』と凄む彼女は、本当に頭に来ているようだ。

まるで噴火寸前の火山のようだな、などと思いながら、しかし今の彼女に余計な刺激を与えるのは賢明な行動ではないので、俺は同情を込めて、

「ご愁傷様」

と言えば、彼女はキツとした視線をこちらを見て、

「なによ、人事みたいに!」

「いや、実際に人事だし」

「この薄情物!!」

そう言っただけ母夏はそっぽを向く。
やれやれ……。こうなったら中々機嫌を直してくれないのが母夏だ。

さて、どうやってご機嫌をとったものか、と考えていると、この状態の母夏にしては珍しい事に彼女の方から『ねえ』、と話しかけてきた。

ん……。？ 驚きを僅かに彼女の方を見やれば、彼女は心配そうな表情を浮かべていた。

何故そんな表情を浮かべるのか？ 理由が見当たらず、そのまま相手の出方を伺っていると、彼女は言いよどむ様に一度上唇を軽く噛んだ後、こちらを見て、

「何かあった？」

と聞いてきた。

何か……とは、『何』を指してそう聞いてきたのか。心当たりを探れば……まあ、ない事もない。

「何でそう思ったの？」

「だって今日のキヌガサ、なんか無理してる。表情が辛そうだよ」

はあ、灰谷に続き母夏にまで……、どやら俺はとことん表情に出る性質らしい。

こんな簡単に明け透けに心情を見破られるなんて、ちょっと問題じゃないだろうか。

「そんなに顔に出てる？」

少し凹みながら言うと、

「うん、少なくともあたしには違和感バリバリ」

「……そうか」

足を止め、短く嘆息。彼女も自然と立ち止まり、

「理由……、聞かないほうがいい？」

「そうだな、聞かないでくれるとありがたい」

「そっか……。うん、わかった。なら聞かないでおく」

「気つかわせて悪いな」

「そう思うならジューズの一本でもおごれ」

そう言つて一瞬で雰囲気を変えると、彼女はニコツと快活な笑顔を見せる。

正直いまはこの気づかいがありがたい。
だから俺は、

「ああ、一本だけな」

そう言つた。

女々しい奴ゝ母夏ゝ（前書き）

閑話的なものなのでとても短いです。

そして主人公以外の視点なので三人称で書いてます。

女々しい奴ゝ母夏ゝ

「隠したいのならもつと上手く隠せよな、ばゝか」

帰るなり自室のベッドにダイブした母夏は、はゝ、と長めの息を吐くと、うつ伏せから仰向けに。視界には去年張り替えたばかりの真っ白なクロスの天井が見える。

「今日だったつけ、たしか先輩がいなくなったの………………。もう一年も経ってるのにさ、ほんとに女々しい」

呟き、母夏は視界を閉ざすように腕で目元を多い隠す。

今はこのクロスの白さが煩わしかった。

もう一度長めの息を吐き、

「わかってるよ、わかってる。あいつにとってどれだけ先輩が特別な存在か……。でもさそれって報われないじゃん。居ない人の事をいつまでも思っで、考えても、今その人はここに居ないんだからさ……………、卑怯だよ先輩。自分だけでなくあいつの心も向こうに持つていつちゃってさ、ほんとに卑怯だ」

覆った腕をどかすと、おもむろに枕元に置いた携帯電話をとる。

開いた携帯を操作して出したのはアドレス帳、その『力』行。

少し下にくだれば、見慣れたその名前があった。『衣笠 深星』

その名前と睨みあつて数秒、母夏は結局携帯を放り投げ、本日三度目の盛大な溜息つき、

「結局女々しいのはあたしも変わらないか」

全ての思考を放棄するように彼女は瞼を閉じた。

何時の日か夢

その人に出合ったときの初めての言葉は今でも覚えている。

「無様ね」

今まで賛美の言葉でもてはやされてきた俺には、衝撃を与えるに充分な言葉だった。

「まるで飛び方を忘れて水面でもがく水鳥みたい」

「水鳥……？」

「そうよ。あなたは本当の天才じゃない。あえて言うなら天才の凡人って言うところかしら？」

『天才の凡人』、言いえて妙な言葉だが、今の俺にはしっくり来る言葉だと思った。

確かに俺は本物の天才じゃないのだから。

「努力という一面を必死に水面下に隠して楽しい？」

「何が言いたいんですか？」

「『天才』、本当はその言葉に、その言葉を気軽に使ってくるエキストラ達に嫌気がさしてる癖に、同じように歩調を合わせてへらへらと頭空っぽのような笑みを作ってほんとに楽しいの？」

この人の言葉は俺の心の隅に凝り固まっていたシコリを的確に叩いてくる。

正直、訳知り顔でこんな事を言われてむかつく。

けれど一番むかつくのは、言い返すことのできない自分だ。

それが意味する事は……、

「ほんとうはそんなに自分に嫌気がさしてるんでしょ。無様にもがいて、もがいて、必死に抗おうとして、けれど抗い方を……飛び方を知らない貴方は飛ぶ事も、ましてや羽ばたくことすらできない。だから無様といったのよ」

ほんとうに勝手な言葉だ。俺のこと何も知らないくせに……。

「あら、スイッチ入っちゃったかしら？ 顔が真剣^{マジ}になってるわよ」「うるさいッ！！」

言ってから、ほんとうに自分から出た声なのかと驚く。生まれて初めて怒鳴ったかもしれない。もっと小さい頃にはあったのかもしれないけど、『俺』が『今の俺』として認識してからは初めてのことだ。

先輩は俺の大声にも意に返さず——むしろ楽しそうに笑って、

「なんだ、きちんと怒る事もできるんじゃない」

とこちらが見蕩れそうになるほどの綺麗な笑顔を浮かべて満足そうに頷く。

なんだか、こちらだけ一方的に怒って、怒鳴って——バカみたいだ。

『糠に釘』とはこんな事を言うのかもしれない。
毒気を抜かれ、少し冷静になった俺は急に恥ずかしさがこみ上げる。

何故俺はこのとき恥ずかしいと思ったのか——そのときはわからなかったけど、きっとこの人にガキっぽい一面を見られたのが嫌だったのかもしれない。

こちらの心情などお見通しとでも言うように、その人はくすくす

笑うと、唐突にねえ、と切り出した。

「わたしと取引しない」

「取引……？」

「そう取引……。あなたは対価を払い、わたしがそれに見合ったものを与える。契約と言い換えてもいいわ。あなたが支払う代償は一つ、それはね——」

その言葉はとてとても甘い蜜のように甘美で、危険だとわかっていても抗いがたい——そう、まるで中毒性のある薬物のように俺の中にすつと染み渡っていった。

俺はこの日、悪魔と契約を交わした。

朝〜いつもの光景〜

『ぴびぴび』『ぴびぴび』、けたたましい電子音により急速に意識が浮上させられる。

「あさ、か……」

何か懐かしい夢を見ていたような気がするが……、だめだ思い出せない。

夢というのは得てしてこういうものだろう。思い出そうと思った時に限って思い出せるものではない。

ぼやけた視界も一度こすれば次第に定まってくる。眩しいと思った自分の感覚は間違っていないかつたらしい。見れば開け放たれた小窓から俺の顔に太陽の光が燦々振り注いでいる。何の嫌がらせだろうか。いや、カーテンを開けたまま寝た俺が悪いのだろうが、朝かなんか釈然としない。まあいい、とりあえず今は俺の気持ちなど墨に置いておこう。それよりも、

「うるさい」

先ほどからずっと鳴りっぱなしの目覚まし時計を乱暴に止める。

起きた状態でずっとこの音を聞かされ続けるのは、さすがに精神衛生上よろしくない。

時計は俺の平手の一撃により完全に沈黙した。その手でそのまま時計を掴み、顔の前まで持つていくと盤面に刻まれた時刻は七時二〇分。まだ余裕がある。

二度寝したい誘惑にも駆られるが、それを実行してしまったら遅刻は確実だろう。

甘い誘惑を振り切り何とか身体を起こした直後だった。『ガチャ』

とノブを回す音が部屋に響いた。続けて、

「おにい、起きた？」

開かれた扉の隙間からは顔だけ出して覗き込む、可愛らしいという言葉が似合いそうな小柄の女の子の姿が。名を『衣笠 琴音』——「おにい」と呼ばれたが別に、彼女は本当の兄妹という訳ではない。俺が居候している先の娘——俺の親父の兄にあたる人の娘で、関係的には従兄弟という事になる。

左側だけを青いリボンで結う、という琴音の特徴的な髪型を見るに、どうやら既に支度を終えているらしい。

「おにい？」

いつまでも返事をしない俺を不審に思ったのか、彼女が身体ごと部屋に入ってくる。

俺はそれに遅れて、

「……ああ、わるい。おきてるよ」

「そう……ご飯出来てるから居間で待ってるね」

「いつも、ありがとな」

「ん、それがわたしの役割だから」

言葉数も少なく、それだけ言うと彼女はさっさと部屋から出て行く。

一見するとあまり仲が良くないように思えるがその逆だ。俺と琴音はいたって良好と言っていい関係を築いていると思う。これがあまり知らない人だったら彼女は口すら聞いてくれない。実際初めて会ったときはそうだった。

つまり会話が短いのは彼女の『仕様』で、だからこれが普通で、

当たり前の光景なのだ。

制服に着替え、顔を洗ってから居間にいくと朝食の乗ったテーブルに座る琴音の姿があった。そして反対側の席には何故か灰谷の姿も。

「よお」

彼は悪びれた様子もなく、ここに居てさも当然といった感じで、俺に向かって気軽に片手あげる。

「なんで朝からお前がこの家にいるんだ」

「いや、お前を迎えにきたら琴音ちゃんが飯食ってけって言うからさ」

「こんな時間にか？」

「ああ、こんな時間にだ」

家を出るまでにまだ二十分以上ある事を考えれば、これが計画的犯行であることは明確だ。

「おにい、だめだった？」

琴音が聞いてくる。不安そうな表情を浮かべ、上目遣いでこちらを見る彼女の表情は——正直苦手だ。身体が小柄な事も相まって、なんだかこちらが弱いものいじめでもしているような気分になる。俺にいじめて悦に入るような『加虐気質』があれば——まあ、別だが。少なくともそのような下種な趣向は持っていない。

それに仮にも『おにい』と呼び、慕ってくれている彼女に対して、
どうやら俺は客観的に見ても過分以上に『甘い気質』を持っている
らしい。彼女の頼みなら大抵のことは聞いてしまいそうな気がする。
もつとも彼女からお願いをされことなどほとんどないのだが。

真向かいの灰谷の顔をちらつと一瞥、すると彼は楽しそうにニヤ
ニヤと嫌らしい笑みを浮かべて事の様子を見守っていた。こいつの
この表情だけは好きになれそうにない。

俺は改めて琴音を正面から見て、

「そんなことないよ。ありがとう」
「ん」

彼女は満足そうに頷いた。

朝からこの顔を見ただけ、まだ良しとしよう。

登校、けれど波立つ

いつもの時間に俺は灰谷と二人で家を出た。

琴音は現在中学生、当然通う学校も違うので家をでる時間も当然のように異なる。

琴音は既に俺たちよりも十分ほど早くに家を出ている。

「いや、あいかわらず琴音ちゃんの手料理はうまいな。俺、嫁さんにするなら琴音ちゃんみたいな子がいいわ」

「寝言は寝てから言え」

お腹が膨れたせいか、幸せそうな顔でのたまう灰谷をよそに、俺はなんとなく上へと視線を向ける。

雲ひとつない晴れ渡った空は、まさに快晴と言っていいだろう。少し空気が寒くなり始めたこともあり空気も心なしか澄んでいるように感じる。

うん、いい天気だ。こういう日は一日中のんびりできたら、とも思う。

学校までの道中、昨日のテレビの話など、灰谷と差しさわりのない、くだらない話をしてしていると、

「そつえばさ——」

と灰谷は話の終わりに、新たな話題を提供するようにその言葉を口にした。

「なんだ？ またどうでもいい話か」

「ちげーよ、てかお前がオレの話をどう思って聞いているか、よー

く分かったよ。まあ、それは置いとくとして」

「置くんだな」

「いちいち突っ込むなってーの！　ったく……まあいい、続きだけだよ。どうやら今日転校生がくるらしいんだよ」

「あい変わらず耳聡いな。どこからそんな情報を仕入れてくるんだ」

「それは企業秘密だ。それで俺が仕入れた情報によると女、しかもかなりの美人らしい」

「そうか」

「かーッ、また随分と淡泊だな……。男としてどうなの——普通もつと期待しね？　こう本能としてワクワクするもんがあんだろ？」

「俺はまさか、転校生の話題一つでここまで俺の男を否定されるとは思わなかったよ」

俺の答えに灰谷は、はあ、とあからさまな溜息をつき、呆れた反応を見せる。

こいつにこんな態度を取られるのは少しムツと来るものがあるが——実際、顔も知らない転校生の話などの興味もないし、どうでもいい。多少こんな時期に、とは思うがそれも些細なことだ。

「とりあえず興味はないよ。その手の話題はお前に任せる」

「ほんとにそんな事を言っているのか？」

「どうということだ」

見えてきた校門をくぐり、俺は言う。

灰谷は俺が話題に食いついて来たことに満足したらしい。彼は、ふふん、と一度鼻をこすると、もったいつけて、

「……実はな、その転校生の名前が非常に興味深いだわ。偶然だと思っんだが、なんとその転校生の名前が——」

登校、けれど波立つ（後書き）

11月24日現在、とりあえず書いておいたストックは全て放出しました。一応これで連続更新は打ち切りです。

ここまでで私が使っているワードソフトの10ページにあたる量になります。

この10ページを目安に、投稿、ストック溜め、放出、を繰り返していこうと思います。

今後ともこのような駄作ですが、目を通していただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8378y/>

この青空に星を

2011年11月29日12時55分発行